

コントロール欲求と要求水準

安藤 明人

(武庫川女子大学文学部人間関係学科)

Desire for control and level of aspiration

Akihito Ando

*Department of Human Relations, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan*

Abstract

The present study was designed to examine the role of individual differences in the desire for control in goal-setting behaviors. 100 female undergraduates served as subjects in two studies. In Study 1, all had taken the Japanese version of the Desirability of Control Scale as part of a large test battery. In Study 2, subjects participated in the continuous summation experiment examining level of aspiration in groups. Then, subjects were categorized into four types of level of aspiration, such as ideal, minimum, realistic, and mixed type. Scores of the Desirability of Control Scale were not found to account for individual differences in goal-setting behaviors. However, three personality characteristics such as loneliness, self-esteem, and extraversion were revealed to be significant factors in discriminating types of level of aspiration.

人は一般に、自分の行動が何らかの結果を生み出す、つまり行動と結果が随伴的であり、自分は結果として環境をコントロールできるという知覚をもつことができる場合、精神的安寧を得て幸福感を増大させることができる。逆にコントロール感をもつことができない場合は、無力感、抑うつ、ストレスといった不快な状態を経験することになる。ただしこの場合、実際にコントロールできるかできないかということが問題なのではなく、コントロールできると知覚できるかできないかという認知あるいは信念の態様が重要なのである。

人生においては、すべてが思い通りにうまくいくということ、換言すれば、すべての自分の行動が随伴的に良い結果に帰結し、思い通りの人生を歩むことができるのはまれであり、人生は思い通りにいかないことの連続と言っても過言ではない。したがってこのコントロール不可能な出来事に対していかなる対処方略をとるかが、精神的健康の維持にとってきわめて重要であるといえる。この個人の対処方略を考える場合、つぎの点を考慮に入れて検討することが重要である。まず第1は、そもそもその個人が、自分の環境や出来事をコントロールしたいという欲求をどの程度もっているかという問題である。この点に関しては、Burger & Cooper(1979)⁴⁾がコントロール欲求(desire for control)という概念を提出し、この欲求の強さが安定した一つの人格変数としてとらえられることを指摘した。第2は、実際には自分の力ではコントロールしていないにもかかわらず、それをコントロールしていると信じ、認知するという「コントロール錯覚」(illusion of control; Langer, 1975⁸⁾)の問題である。第3は、コントロールがうまくできたり、あるいは逆にできなかった場合、その原因をどこに求めるかという原因帰属の問題である。この原因帰属様式には、各個人においてかなり固定的なパターンを見いだすことができる。

コントロールと適応や精神的健康の問題を考える場合、上で述べた3つの観点をそれぞれ個人差変数として検討する必要があるが、今回はまずその第1段階として、コントロール欲求と達成行動との関連について検討を加える。

Burger(1985)³⁾は、達成行動の個人差を説明する変数としてコントロール欲求を取り上げ、一連の実験によってその関連性を検討した。彼は、高いコントロール欲求が高い達成行動へと影響を及ぼす過程として、次の4つの段階があるとするモデルを仮定し、その検証を行った。第1段階は「要求水準(level of aspiration)」の段階である。コントロール欲求の高い者は低い者と比較して、より高い要求水準をもち、自分の能力に見合ったより現実的な目標設定を行うと仮定する。第2段階は「挑戦に対する反応」の段階である。コントロール欲求の高い者は、達成課題に含まれる困難さを自分のコントロール能力に対する挑戦として受けとめ、それに対するリアクタンス(reactance; Brehm, 1966²⁾)として、課題達成のためにより大きな努力を払うだろうと仮定する。モデルの第3段階は「持続性(persistence)」の段階である。コントロール欲求の高い者は自分にコントロール能力が欠けていることを知覚することを避けようとする傾向が強い。そのために困難な課題に取り組んだとき、達成を放棄したり他者に援助を求めるまでにより長い時間を費やす、つまり忍耐強く課題に取り組むと予想する。最後の第4段階は「成功・失敗の帰属」の段階である。コントロール欲求の高い者は後続の課題への動機づけを高めるように自分の遂行に対する帰属を行うものと考えられる。つまり、成功の原因については自己の能力や努力といった内的要因に帰属し、失敗については運や課題の困難さといった外的要因に帰属させることによって、コントロール感を充足させるように動機づけられていると考える。Burger(1985)³⁾はこの4段階モデルの妥当性を検証するために6つの実験を行い、いずれもモデルが設定する仮説を支持する結果を得ている。ただしこのモデルは、彼も指摘しているようにまだ試案的な段階にあり、その妥当性と有効性を証明するためには、被験者の多様性を増やし、さらに課題とする達成行動をより現実場面に即したものにすることが必要である。

そこで本研究では、Burger(1985)³⁾で用いられた課題(アナグラム、パズル、暗号解読など)よりは現実場面に近いと考えられる加算作業という達成課題を用いて、その連続した一連の作業における目標設定行動を分析することにより、各被験者の要求水準のタイプの分類を行う。そしてその要求水準のたて方にみられる個人差を説明する要因としての、コントロール欲求という人格変数の有効性について検討することを目的とする。

方 法

被験者 心理学の授業を受講していた女子大学生 100名。

手続き 心理学の授業における実習の一貫として、被験者はつぎの人格・態度に関する調査と要求水準の実験に参加した。

人格・態度に関する調査 調査に用いた調査票には、複数の人格特性および態度を測定する尺度が含まれており、大きなテスト・バッテリーを構成していた。調査票は心理学の授業中に配布し、1週間後に回収した。ここで用いられた尺度は、独自性欲求(岡本, 1985¹²⁾)、自意識(中村, 1983¹⁰⁾)、自己モニタリング(岩淵・田中・中里, 1982⁵⁾)、社会的スキル(菊池, 1988⁷⁾)、孤独感(LSO)(落合, 1983¹¹⁾)、Locus of control(鎌原・樋口・清水, 1982⁶⁾)、自尊心(山本・松井・山成, 1982¹⁷⁾)、自己査定(Strube & Yost, 1993¹⁶⁾) ; 日本語版は安藤の試訳)、タイプ A(前田, 1985⁹⁾)、無力感(総理府青少年対策本部, 1981¹⁵⁾)、コントロール欲求(安藤, 1995¹⁾)、CMI(Cornell Medical Index ; 抜粋)、YG 性格検査の12種類である。

要求水準の実験 心理学の実験・実習の授業の一貫として行った。被験者は、4~6人によって構成されるグループを構成し、このグループごとに以下の手続きで実験を行った。なお実験は、心理学実験指導研究会(1985 a¹³⁾)の要求水準の実験の手続きに基づいて行われた。

実験材料としては内田・クレペリン精神検査用紙を用いた。まず最初に、検査課題の要領を会得させるために、用紙の「レンシュウ」の欄を用いて、30秒間の加算作業の練習を行う。その後、「できるだけ正確に、できるだけ速く」という教示のもとに、1分間の加算作業を行う。その作業量を予備試行の作業量として、それを基準にして、「次はどれくらいできるか」という教示のもとに、第1試行の予想量を答える。そして再び1分間の加算作業を行い、その結果に対する満足度を「不満」「普通」「満足」の3段階で答え、感想を簡単に口頭で答える。そして引き続き、第2試行の予想量を答えてから1分間の加算作業を行う。これを全部で10試行行う。10試行終了後、どのように予想をたてて課題に取り組んだかを筆頭で答えて実験を終了した。

結果と考察

要求水準のタイプ分類

心理学実験指導研究会(1985b¹⁴⁾)を参考にして、本研究では要求水準の設定のしかたをつぎの4つのタイプに分類した。

(A)理想水準タイプ 達成差(attainment discrepancy score; 作業前にたてた予想量と次の作業量との差。以下ADスコアと呼ぶ)の正負にかかわらず、目標差(goal discrepancy score; 今回の作業量と次の予想量との差。以下GDスコアと呼ぶ)が正であるタイプ。具体的には、GDスコアの平均値が被験者の上位25%以内($GD \geq 2.8$)であり、かつGDスコアが10回中8回以上正である者を理想水準タイプとした。

(B)最低水準タイプ ADスコアの正負にかかわらず、GDスコアが負であるタイプ。具体的には、GDスコアの平均値が被験者の下位25%以内($GD \leq -1.0$)であり、かつGDスコアが10回中8回以上負である者を最低水準タイプとした。

(C)現実水準タイプ GDスコアが0を中心として上下しているが、その上下の変動の幅が小さいタイプ。具体的には、GDスコアの平均値が中位50%($-1.0 < GD < 2.8$)に含まれ、かつGDスコアの絶対値が10回中8回以上3以下である者を現実水準タイプとした。

(D)混合タイプ 要求水準のたてかたが一定でなかったり、あるいは途中でたてかたの方略が変化した者が含まれる。GDスコアの平均値は、現実水準タイプと同じく中位50%に含まれるが、GDスコアの絶対値が4以上である試行が3回以上である者を混合タイプとした。

上記の基準に基づいて、被験者の要求水準のタイプを分類した結果をTable 1に示した。加算作業の実際の作業量については、要求水準の4つのタイプの間には差は認められなかった。しかし、下位検定を行った結果、最高の作業量を示した混合タイプと最低の作業量であった現実水準タイプとの比較では、混合タイプの作業量のほうが有意に多かった。次の作業の予想量については、4群間に差がみられ、理想水準と混合タイプが高く、最低水準と現実水準タイプが低かった。

Table 1 要求水準のタイプ別の加算作業の遂行結果

	理想水準 (N=30)	最低水準 (N=18)	現実水準 (N=31)	混 合 (N=21)	F値	検定
予 想 量	79.86±13.46	70.55±13.31	70.06±12.78	79.65±10.89	4.37	**
作 業 量	75.22±12.61	74.81±14.71	70.42±12.48	80.18±11.34	2.39	
GDスコア	+5.52± 3.88	-3.57± 1.86	+0.75± 1.23	+0.28± 1.39	52.86	**
ADスコア	-4.64± 3.89	+4.26± 1.72	+0.36± 1.19	+0.53± 1.34	52.58	**
満 足 度	1.91± 0.29	2.26± 0.51	2.07± 0.29	2.10± 0.24	4.04	**

注1) 値は平均±標準偏差。

注2) 満足度は、「満足」を3、「普通」を2、「不満」を1として点数化したものである。

注3) 検定は、1要因の分散分析を用いた。

注4) **: $p < 0.01$

GDとADの2つの差スコアのいずれについても、4群間に顕著な差がみられた。しかし、下位検定を行った結果、GD、ADのどちらも、現実水準タイプと混合タイプの間には有意な差は認められなかった。

前で指摘したように、加算作業の作業量そのものについては4群間に差はみられず、ほぼ同等の成績を示していたのに対して、その作業結果に対する満足度については、4群間に相違が認められた。満足度が最も高かったのは最低水準タイプで、一方理想水準タイプの満足度が最も低かった。この最低水準と理想水準タイプの満足度の間には、下位検定の結果有意差が認められた。

各自の要求水準の現れとしての目標設定行動は、今回の場合、今回の加算作業の目標をどのレベルに設定するかという行動として現れる。つまり、前回の作業量より高めのレベルに目標を設定するか、同じ程度のレベルに設定するか、それとも前回よりも低めに設定するかという方略の問題である。この点についてさらに詳しく分析するために、GDスコアの分布を要求水準のタイプ別に示したTable 2をみよ。GDスコアの分布は4つの要求水準のタイプの間で明らかに異なっている($\chi^2(6)=437.61$, $p<0.0001$)。なかでも、理想水準タイプと最低水準タイプは対照的なパターンを示している。つまり理想水準タイプは、ほとんどの場合、今回の予想量を前回の作業量より高く設定しているのに対して、最低水準タイプは逆に、今回の予想量を低めに設定している。その結果としてADスコアは、Table 3に示されているように、理想水準の場合は全体の70%以上がマイナスになっているのに対して、最低水準では、マイナスになったのは13.9%にすぎない。また各試行の作業結果に対する満足度の分布がTable 4に示されているが、理想水準タイプは「満足」よりも「不満」のほうが多くなっているのに対して、最低水準タイプでは、「満足」が「不満」の倍以上の割合を占めている。

Table 2 要求水準のタイプ別のGDスコアの分布

	+	0	-
理想水準 (N=30)	283 (94.4)	10 (3.3)	7 (2.3)
最低水準 (N=18)	14 (7.8)	12 (6.7)	154 (85.5)
現実水準 (N=31)	169 (54.5)	59 (19.0)	82 (26.5)
混 合 (N=21)	112 (53.3)	25 (11.9)	73 (34.8)

注1) $\chi^2(6)=437.61$, $p<0.0001$

注2) ()内の値は構成比 (%)

Table 3 要求水準のタイプ別のADスコアの分布

	+	0	-
理想水準 (N=30)	53 (17.7)	28 (9.3)	219 (73.0)
最低水準 (N=18)	147 (81.7)	8 (4.4)	25 (13.9)
現実水準 (N=31)	150 (48.4)	34 (11.0)	126 (40.6)
混 合 (N=21)	96 (45.7)	21 (10.0)	93 (44.3)

注1) $\chi^2(6)=200.34$, $p<0.0001$

注2) ()内の値は構成比 (%)

以上の結果より、理想水準タイプと最低水準タイプは、両群間に加算能力の差はみられないにもかかわらず、きわめて対照的な目標設定方略を採用することにより、異なった満足感を得ていることがわかる。すなわち、理想水準タイプは、目標を常に自分の実力より高めに設定するので、その目標はほとんど達成されない。したがって満足度も低くなる。しかしそれにもかかわらず、要求水準を下げて目標を達成し、満足感を高めようという方略は採用しない。つまりこのタイプは、目標は達成を目的として設定されるのではなく、あくまでも努力目標であって、その目標に少しでも近づこうという動機づけによって、自分の作業量を高めようとしているものと考えられる。これに対して最低水準タイプは、目標は必ず達成できるレベルに設定し、目標を達成し満足感を得ることを重視する方略を採用している。すなわちこのタイプは、目標の未達成は「失敗」であるとみなし、この失敗に伴うネガティブな感情の生起を極力回避しようとしているものと推測できる。これに対して理想水準タイプは、目標の未達成は必ずしも「失敗」であるとみなしておらず、逆に未達成による不満感を感じ、次の課題の達成を高めようとしているものと考えられる。

Table 4 要求水準のタイプ別の満足度の分布

	不満	普通	満足
理想水準 (N=30)	97 (32.3)	132 (44.0)	71 (23.7)
最低水準 (N=18)	34 (18.9)	66 (36.7)	80 (44.4)
現実水準 (N=31)	77 (24.8)	133 (42.9)	100 (32.3)
混 合 (N=21)	58 (27.6)	73 (34.8)	79 (37.6)

注1) $\chi^2(6)=28.36, p<0.0001$

注2) ()内の値は構成比 (%)

現実水準タイプと混合タイプは、GD スコア、AD スコア、満足度の平均値、および AD スコア、満足度の分布においては差が認められず、類似した要求水準のパターンを示した。しかし、混合タイプのほうが予想量、作業量ともに現実水準タイプより有意に多く、また GD スコアの分布で、0(現状維持)を目標として設定する割合が、混合タイプより現実水準タイプのほうが高い、という点で相違が認められた。

現実水準タイプは、目標を高くも低くもない現状維持レベルにかなり一貫して設定しているが、一方混合タイプは、目標設定の方略を 10 試行の間でかなり頻繁に変えている。この目標設定行動の相違は、上で述べた要求水準の量的側面ではあまりはっきりとした形では現れてこないが、唯一、予想量と作業量のレベルにおいてははっきりとした差となって現れている。つまり、混合タイプの方が予想量、作業量ともに現実水準タイプより有意に高い値を示している。このことより、現実水準タイプは、この加算作業という課題そのものに対する動機づけが弱く、課題において高い達成をめざそうという気持ちは少なかったものと推測できる。それが予想量、作業量の低さに反映されているものと考えられる。したがって、現実水準タイプの被験者に採用された現状維持レベルでの目標設定行動は、課題達成に対する消極的な態度の結果であったと理解できる。これに対して、混合タイプの被験者に見られた実験の途中での目標設定行動の方略の変更は、課題に対するいかげんな態度からきたものではなく、逆になんとか良い成績を修めようとして、試行錯誤を行った結果であると考えられる。そしてそれが 4 つの要求水準の中でもっとも良い遂行成績となって現れたものと推測できる。

コントロール欲求と要求水準

課題遂行の際の要求水準のたてかたに個人差がみられることが上の分析で明らかになったが、つぎにこの個人差を説明する要因としてコントロール欲求を取り上げ、コントロール欲求の高低と加算作業遂行の際の目標設定行動にみられる要求水準との関連について検討してみる。

Table 5 は、被験者の中からコントロール欲求尺度得点の高い者上位 25% (91 点以上, N=25; 高 DC 群) と低い者下位 25% (77 点以下, N=25; 低 DC 群) を抽出して、両群の加算作業の遂行結果を比較したものである。これによると課題達成場面における要求水準の量的指標となる予想量、作業量、GD スコア、満足度のいずれにおいても、コントロール欲求の高低による有意な差は認められず、AD スコアにおいてのみ傾向差が見られただけであった。

つぎにコントロール欲求の高低が、量的側面だけでなく質的側面をも加味した総合的な要求水準のタイプに影響を与えているかについて検討してみる。Table 6 は、コントロール欲求の尺度得点によって抽出された高 DC 群、低 DC 群のそれぞれ 25 名について、4 つの要求水準のタイプ分類に当てはまる人数を示したものである。その結果、両群間には要求水準のタイプの分布に有意差は見られなかった ($\chi^2(3)=4.54, N.S.$)。

以上 2 つの結果より、今回の研究では、コントロール欲求の高低と課題達成場面での要求水準のたて方との間には、はっきりとした関連性を認めることはできなかった。

Table 5 コントロール欲求の高低と加算作業の遂行結果

	高DC群 (N=25)	低DC群 (N=25)	t値	検定
予 想 量	75.78±15.22	75.28±10.21	0.14	
作 業 量	74.36±13.54	75.78± 9.86	0.42	
GDスコア	+2.07± 4.23	+0.50± 3.63	1.41	
ADスコア	-1.42± 4.19	+0.49± 3.75	1.70	+
満 足 度	1.96± 0.29	2.05± 0.51	0.87	

注1) 値は平均±標準偏差

注2) DC:コントロール欲求

注3) +:p<0.1

Table 6 コントロール欲求の高低と要求水準のタイプ

	理想水準	最低水準	現実水準	混 合
高DC群 (N=25)	9	3	5	8
低DC群 (N=25)	6	8	7	4

注1) 数値は人数

注2) $\chi^2(3)=4.54, N.S.$

要求水準のタイプと人格特性

前の項では、要求水準のたて方にみられる個人差の説明要因として、とくにコントロール欲求を取り上げ検討してみたが、有意な説明変数であることは確認できなかった。そこでつぎに、それ以外の人格特性と要求水準のタイプとの関連について検討を行う。

Table 7は、要求水準のタイプ別に各人格特性の平均値と標準偏差を示したものである。また、要求水準のタイプを要因とする1要因の分散分析を行った結果についても示してある。取り上げられた32の尺度のうち、要求水準のタイプによる有意な差が認められたのは、孤独感(LSO-E) ($F(3, 96)=2.704, p<0.05$)、自尊心 ($F(3, 96)=3.685, p<0.05$)、YGテストのS因子(社会的外向性) ($F(3, 94)=2.787, p<0.05$)の3つの尺度のみであった。孤独感(LSO-E)は自己の個性の自覚の程度を示す尺度で、この得点が高いほど、人間はもともと一人であるとする傾向が強いことを示す。結果では、混合タイプの被験者の個性の自覚がもっとも強く、理想水準タイプの被験者の個性の自覚がもっとも弱かった。このLSO-Eと直交すると仮定するLSO-Uは、人間同士の理解・共感性の可能性についての感じ方を示す指標となっており、この点が高いほどお互いに理解・共感できると考える傾向が強いことを意味する。この尺度については、要求水準の4タイプの間には有意差はわずかの差でみられなかったが、傾向差は認められた。また下位検定の結果、最低水準の被験者は、理想水準および混合タイプの被験者より有意(5%水準)に得点が低い、つまりお互いに理解・共感できると考える傾向が弱いことが明らかになった。

自尊心については、混合タイプの自尊心がもっとも高く最低水準がもっとも低かった。下位検定の結果、混合タイプの被験者は、最低水準(1%水準)および現実水準(5%水準)の被験者より有意に自尊心が高かった。

YGテストでは、分散分析の結果、要求水準の要因間に有意な差が認められたのは社会的外向性を示すS因子のみであり、下位検定の結果、理想水準タイプは、最低水準タイプ、現実水準タイプより有意(5%水準)に高い値を示した。これ以外の因子のうち、要求水準の4タイプの間には有意差は認められないが、下位検定でいずれかの2つのタイプの間で有意差がみられた因子は、Q因子(非客観性;理想水準>現実水準, $p<0.05$)、G因子(一般的活動性;理想水準>現実水準, $p<0.05$)の2因子であった。

Table 7 要求水準のタイプと人格特性

尺度名	理想水準 (N=30)		最低水準 (N=18)		現実水準 (N=31)		混合 (N=21)		検 定	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F値	有意差
独自性欲求	96.24	12.08	93.19	14.02	91.60	12.05	92.10	13.52	0.8501	
私的自意識	35.41	6.60	33.88	6.68	33.73	7.76	35.71	5.27	0.4908	
公的自意識	26.38	4.76	24.00	3.39	26.07	4.96	25.81	3.67	0.6121	
社会不安	17.79	4.28	18.50	5.02	18.20	4.43	18.81	4.56	0.2733	
自己モニタリング	79.03	16.11	76.94	9.52	76.38	8.99	79.19	11.29	0.2390	
社会的スキル	54.06	12.06	52.33	11.84	53.21	9.69	53.67	8.53	0.1971	
孤独感 (LSO-U)	12.03	4.38	7.22	7.60	9.93	5.36	11.24	5.93	2.6644	
孤独感 (LSO-E)	0.59	4.70	3.22	4.24	2.41	4.87	4.38	4.05	2.7035	p<0.05
Locus of control	51.17	6.29	48.06	8.01	50.52	5.70	51.00	6.71	0.9670	
自尊心	26.41	4.30	23.72	6.31	26.07	3.77	28.57	4.28	3.6849	p<0.05
自己査定	22.66	3.31	22.72	3.88	23.00	4.06	22.00	3.25	0.3997	
タイプA	15.24	5.39	14.06	5.35	14.17	5.05	14.62	4.01	0.2319	
無力感	14.79	3.02	16.78	4.21	15.41	3.34	14.67	3.78	1.3611	
コントロール欲求	86.17	14.03	82.39	14.72	83.24	8.79	86.24	9.96	0.6656	
YG*(D)	12.14	5.66	13.78	4.52	11.06	5.27	11.10	5.52	1.2174	
YG(C)	11.97	4.08	12.11	4.73	11.16	4.32	12.10	3.57	0.3401	
YG(I)	8.07	4.25	9.83	5.50	8.32	4.39	9.00	3.83	0.6148	
YG(N)	10.38	4.23	10.06	4.07	10.00	4.04	10.43	3.82	0.1356	
YG(O)	9.28	4.85	9.56	4.08	7.32	3.49	9.19	3.91	1.8456	
YG(Co)	5.90	3.26	6.94	3.83	7.48	4.10	7.05	2.84	0.7710	
YG(Ag)	12.41	3.82	10.33	5.24	10.81	3.03	10.81	4.46	1.2715	
YG(G)	11.79	3.99	9.94	4.29	9.90	3.48	11.48	5.68	1.8136	
YG(R)	14.48	3.12	13.83	4.09	12.74	4.89	12.80	4.19	1.8136	
YG(T)	10.72	4.98	10.44	4.55	10.68	4.26	8.75	4.26	0.9265	
YG(A)	10.28	5.08	8.83	5.09	7.90	4.44	8.75	5.40	1.1521	
YG(S)	14.90	3.66	11.89	4.99	12.03	4.21	12.55	4.81	2.7874	p<0.05
TEG**(CP)	6.93	4.23	6.22	3.52	5.90	3.70	5.95	3.87	0.4169	
TEG(NP)	13.41	3.78	13.17	4.25	11.10	4.26	12.52	4.64	2.0791	
TEG(A)	10.28	4.21	10.61	4.89	9.94	4.84	10.05	3.36	0.1007	
TEG(FC)	12.48	3.57	10.50	4.74	11.06	4.23	11.14	3.77	1.2175	
TEG(AC)	8.93	4.28	10.72	5.34	9.52	4.07	10.62	3.72	0.8512	
CMI*** (抜粋)	15.17	6.67	13.72	8.66	14.81	7.86	12.95	6.14	0.4514	

* : YG性格検査

** : 東大式エゴグラム

*** : コーネル・メディカル・インデックス

東大式エゴグラムでは、NP(養育的な親)においてのみ、理想水準タイプより現実水準タイプの方が高い($p < 0.05$)という有意差が認められた。

以上の結果を総合すると、各個人の目標設定行動と人格特性が密接に関連しているとは必ずしも言えなかった。しかし、要求水準のタイプ別にかなり統一的な人格像が浮かび上がってきたことも確かである。まず理想水準タイプの被験者は、一般的活動性が高く、人との社会的接触を好む傾向にあり、このような対人的な基本的信頼感を基盤とした人格特性をもっていることがうかがえる。この対人関係におけるポジティブな姿勢が、達成課題において失敗を恐れず、常に高い目標を設定し続ける行動に現れていたのかもしれない。一方、この対極に位置すると考えられるのが最低水準タイプである。彼らは、自分の能力に対する自信のなさや対人的不信を背景として、自分の殻に閉じ込めがちになり比較的高い無力感を示した。加算作業能力は他のタイプと比べて決してひけをとらないにもかかわらず、常に自分の能力より低めの目標を設定し続けた背景には、自分自らを評価できない自尊心の低さがあったものと推測できる。混合タイプは、自尊心の高さを背景として、高い達成をめざして課題に果敢にチャレンジしていたものと考えられる。現実水準タイプは、その人格特性から、全般的な活動性の低さを指摘することできる。目標設定において一貫して現状維持レベルを選択したという行動は、高い達成に対する動機づけの低さとこの活動性の低さが反映していたものと解釈できる。

引用文献

- 1) 安藤明人, コントロール欲求尺度(The Desirability of Control Scale)日本語版の作成, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学), 42, 103-109 (1995).
- 2) Brehm, J. W., *A theory of psychological reactance*. Academic Press (1966).
- 3) Burger, J. M., Desire for control and achievement-related behaviors, *J. of Personality and Social Psychology*, 48(6), 1520-1533 (1985).
- 4) Burger, J. M. & Cooper, H. M., The desirability of control, *Motivation and Emotion*, 3, 381-393 (1979).
- 5) 岩淵千明・田中国夫・中里浩明, セルフ・モニタリング尺度に関する研究, 心理学研究, 53(1), 54-57 (1982).
- 6) 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治, Locus of Control 尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討, 教育心理学研究, 30(4), 302-307 (1982).
- 7) 菊池章夫, 思いやりを科学する, 川島書店 (1988)
- 8) Langer, E. J., The illusion of control, *J. of Personality and Social Psychology*, 32(2), 311-328 (1975).
- 9) 前田聡, 虚血性心疾患患者の行動パターン——簡易質問紙法による検討, 心身医学, 25(4), 297-306 (1985).
- 10) 中村陽吉, 対人場面の心理, 東京大学出版会(1983).
- 11) 落合良行, 孤独感の類型判別尺度(LSO)の作成, 教育心理学研究, 31(4), 60-64 (1983).
- 12) 岡本浩一, 独自性欲求の個人差測定に関する基礎的研究, 心理学研究, 56(3), 160-166 (1985).
- 13) 心理学実験指導研究会編, 実験とテスト=心理学の基礎—実習編, 培風館(1985a).
- 14) 心理学実験指導研究会編, 実験とテスト=心理学の基礎—解説編, 培風館(1985b).
- 15) 総理府青少年対策本部編, いまの青年・いまの大人—青少年の社会性と個性に関する調査報告書, 大蔵省印刷局(1981).
- 16) Strube, M. J., & Yost, J. H., Control motivation and self-appraisal. In: Weary, G., Gleicher, F., and Marsh, K. L. (eds.), *Control motivation and social cognition*, Pp. 220-254, Springer-Verlag (1993).
- 17) 山本真理子・松井豊・山成由紀子, 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究, 30, 64-68 (1982).